
松山シンスケ－南国の魔法番外編－

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

松山シンスケ－南国の魔法番外編－

【NNコード】

N8795P

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

「南国の魔法」の影のヒロイン、上杉カナエの彼氏の松山シンスケの苦悩を書いています。

本編を読まなくとも大丈夫だと思いますが、読んでいたほうが彼のつらさがよくわかります。

シンスケがカナエにあつたときから物語は始まります。

全5話です。*ブログで完結後、なろうへ掲載してます。

松山シンスケ（前書き）

現在ありま氷炎が連載中の「南国の魔法」の影のヒロイン、上杉力ナエの彼氏の松山シンスケの苦悩を書いています。
本編を読まなくとも大丈夫だと思いますが、読んでいたほうが彼のつらさがよくわかります。

近所に引っ越してきた子は無口な子だった。
空手をしてるらしく、空手着をきて家を出る姿を何度も見た。

近所なのに話したことがなかった。

中学生になり、同じクラスになった。

その子はいつも一人だった。いじめられる様子もなかった。
クラスの女子とも普通に話してる様子だったけど
なぜかいつも一人だった。

かたくな雰囲気が彼女を包んでいた。

凜とした空気が彼女の周りと包んでいた。

俺はいつの間にか彼女から目が離せなくなっていた。

「上杉さん」

「何?」

俺がそう呼ぶと彼女は読んでいた本から顔を上げた。きれいな顔だつた。目が澄んでいた。吸い込まれそうになつた。

「あ、俺。近所に住んでるんだ。松山シンスケっていうんだ。」

「うん。知ってる。何度か見たことがあった。」

俺は彼女が俺のことを知っていたことがうれしかった。

「その本、好きなの?」

「うん。お気に入りの作家。読んでてせつなくなるんだ」

彼女は笑顔でそう答えた。

俺たちはその日から友達になった。

高校生になり、俺と彼女は違うクラスになり、以前よりも話すことがなくなつた。それでも近所なので本の貸し借りなどをしていたが、彼女は部活に忙しくらしく、俺と顔を合わせることが少なくなつていた。

「上杉、待つてよ」

学校一といつても言いぐらいのモテ男の武田タカオが彼女に声をかけた。彼女は無視して歩いていた。

「上杉、今日は（空手）部長の送別会だから。参加しないとダメだよ

武田が先に歩く彼女の腕を強引に掴むと体育館へ連れていくのが見えた。彼女の顔が少し赤くなつて『いる』ような気がした。

「松山、久しぶり。どうした？」

俺は2年になつたある日、学校で彼女に本を返す口実を作り話しかけた。

「これ、ずっと借りていただろう？」

「ああ、忘れてた。ありがとう」

彼女は微笑んでそう答えた。

背中に刺すよう視線を感じた。それは誰かが俺を見る視線だった。振り返ると後ろにいたのは武田だった。しかし武田は友人達と談笑していた。

「気のせいいか？」

2年になつて彼女の雰囲気は変わつた気がした。やわらかくなつたような気がした。

つまらない歴史の授業でほんやりと窓の外をみると彼女の姿が見え

た。すんなりと伸びた手足が体操着から見え、眩しかった。その長い髪の毛を束ね、額に汗をかいていた。

ふと俺は彼女を見つめる、もうひとつ視線に気がついた。武田が彼女を見つめていた。武田は俺が見ていることに気がつくと微笑んだ。その笑顔は恐ろしく美しく、冷たかった。

3年になり、彼女はまた変わった。

大人の色香というものが、彼女を見ると切なくなつた。

「上杉！」

帰り道、彼女を見た。俺がそう呼ぶと彼女は不機嫌そうに振り向いた。

「松山、ごめん。上杉って呼ぶなつて言つてるだろ？」

武田にはそう呼ばせてるだろ？？と言いたくなつたが、あの美しい冷たい顔を思い出し言つのをやめた。

「わかったよ、上杉さん。今日山田ジロウの本入荷したんだけど借りにくる？」

「本当？読みたいな。あ、でも今日はだめだ。明日行つてもいい？」

「OK。明日な」

しかし数週間たつても彼女が借りにくることはなかつた。

それから1ヶ月がたち、彼女は空手部をやめた。そして彼女は学校も休みがちになつた。

しかし受験が近いある日、俺は彼女を学校で見かけた。

「上杉！」

俺がそう呼ぶと彼女は不機嫌そうに振り向いた。

「上杉って呼ぶなつて言つてるだろ？」

「だったら、カナエって呼んでいい？」

俺の言葉に彼女はため息をついた。

「いいよ。上杉よりはましだ

力ナエって呼べるのか。

俺はうれしくなって笑った。

「じゃあ、力ナエ。お前、市山大学受けるんだりつ~」

「そうだけど?」

何で知ってるんだと彼女は不機嫌そうに俺を見た。

俺は彼女のクラスメートの女子と友達だつた。その子もたまたま市山大志望だつたことから情報を得た。俺は受ける大学を決めかねていたから、彼女と同じ大学に決めた。

「俺もその大学受けるんだ。お前空手部に入つてからなんかずつと急がしそうだつただろう。今はやめたみたいだから。一緒に勉強しようぜ」

彼女は俺を一瞥すると、一人で歩き出した。

「待てよ。どうせ、帰り道は一緒だろ?」

俺は彼女を慌てて追いかけた。

背中に刺すような視線を感じたがどうでもよかつた。

彼女はもう空手部でもないし、武田ではなく俺と同じ大学に行くのだから。

「付き合ってくれないか」

あの日の夕方俺は決意をして彼女にそう聞いた。

彼女はオレンジ色に染まつた空を見上げた。そして俺を見つめた。

「いいよ…」

「本当か！」

俺は嬉しくなつて彼女を抱きしめた。彼女の体がこわばつたのがわかつた。

彼女の美しい黒髪を撫でる。

ベッドで横になつている彼女は時たま、眉をひそめる。

彼女が夜なかなか眠れない性質だということに気づいたのはベッドを共にするようになつてからだつた。

俺は彼女を安心させようとその体を抱きしめた。彼女の腕が俺の腕を掴む。それは痛いくらいだつた。

「武田…」

彼女の口から漏れたその名前に俺は息がとまるかと思つた。寝言らしく、彼女は俺を掴む腕の力を弱めると体を丸めるようにした。寝顔はとても苦しそうだつた。

「なあ、松山。昨日の夜、私にか変なこと言わなかつた？」

彼女はスプーンでミルクに浮かぶコーンフレークをすくいながらそう言つた。俺はいつもお気に入りの日本食の朝食メニューの納豆に卵をいれた。

「いや。別に。」

俺は精一杯笑顔を作つてそつと言つた。

お互に実家通いなので周一はこうやってホテルに泊まつていて、そこの朝食を一緒に吃るのが習慣になつていた。

「松山？納豆混ぜすぎじゃないか？」

そう彼女に言われて見ると卵が泡だつて、手元の小碗の中の納豆が泡だらけになつていた。

「これがうまいんだよ」

俺はそう言しながら納豆をじ飯にかける。

「そう言えば今日は辞令が出る日か。」

「うん、東京に行くことになるけど。平氣か？」

彼女は俺を氣遣つよつに見た。付き合つよつになつて彼女はそういう表情を見せるよつになつた。俺はその顔を見るのがたまらなく好きだつた。

「大丈夫。俺の会社は東京出張多いから。遊びにいくよ。」

俺は笑顔でそう答えた。

会社に彼女を迎えていた。今日は車でこつちに来てたから、そのまま彼女を乗せて家に帰るつもりだつた。

俺は視線を感じた。刺すような視線だつた。

彼女は俺を見ていて、気づいてないよつだつた。

俺は視線の主を探るため、顔を上げた。

武田…。

武田タカオがこちらを見ていた。武田は俺たちの姿を確認すると再び建物の置くに入つていった。

なんで武田が？？

「どうしたんだ？松山」

「なんでもない」

彼女は動搖する俺を心配げに見上げた。

「武田をみたけど？」

迷つたが俺はその夜、彼女に直接聞いた。彼女は一瞬動きを止めた後、視線を俺からはずした。

「うちの会社吸収合併されただろう。親会社が武田が勤めてる会社だつたんだ。私も初めて見たときは驚いた」

彼女は淡々とそう答えた。

「松山？」

俺は急に不安になり、彼女を抱きしめた。

時間がたつに連れて俺の不安は大きくなり、彼女の様子もおかしくなつた。沈んでることが多くなつた。でも彼女の行動は変わらず、彼女が会社外で武田と会つてる様子はなかつた。

あの視線、刺すような視線。

10年たつても変わつていなかつた。

東京に、武田の会社に彼女が働くようになつて数ヶ月がたつた。俺は武田に婚約者がいることを知りほつとした。

しかしあの射抜くような視線が気になつっていた。

10年前とひとつも変わらない視線。

そして、考え事をすることが多くなつてしまつた彼女。

俺は不安になつた。彼女を束縛したかった。

結婚……俺はそのことを考えることが多くなつた。
でも俺は彼女の答えを知つていた。

仕事が好きな彼女、あいつを忘れられない彼女。

俺の子供を生んで家庭に入つてくれるとは思わなかつた。

でも俺は言わずにはいられなかつた。

髪の色をあいつと同じ色にかえ、彼女はますます苦しそうな顔を浮かべるようになった。

ある日、ベッドで眠る俺の髪を愛しげに撫でていた。髪の主が俺だとわかると一瞬びっくりしたような顔になつた。彼女はベッドにもぐりこみ、顔を隠したが、俺にはわかつていた。

でも諦め切れなかつた。

彼女が好きだった。

いつから彼女が俺にとつて特別な存在になつたのかわからない。
でも俺は離したくなかった。

この腕にずっと抱きしめていたかった。

「カナエ…」

ぎゅっと俺は彼女の体を抱きしめた。一瞬体がびくっと震えたが彼女は抵抗しなかった。

俺はその首筋にキスをした。そして彼女の柔らかな胸に掴んだ。彼女は甘い声をあげた。俺は止められなかった。

彼女が好きだった。
離れられなかつた。

彼女を解放してやることができなかつた。

「シン！」

細身の体の美女は俺を見ると妖艶な笑みを浮かべた。

「ジユディ。久々だな」

俺は笑顔を向けるとその向かいの席に腰を下ろした。

「昨日、カナエに会ったわ！」

ジユディは嬉しそうに笑いながらそう言った。彼女の紹介で俺は7年前にジユディ・チュアに会った。初めのうちは発音がすこしおかしな日本語を使っていたが卒業するころには完璧な発音で日本語を話せるようになっていた。

「東京に行つたのか？」

「ええ、だつて私の目的はカナエだもの」

ジユディはそう言ってまた笑つた。ジユディはよく笑うようになつた。大学のころは彼女と同じでぶつちよづらをしてることが多かつたのに。

「シンは本当変わらないわね。カナエもだつたけど。相変わらず人形みたいだつたわ」

俺は黙つてジユディの話を聞いていた。

「ねえ。シン、カナエもらつてもいい？」

ジユディの言葉に俺は口の中のお茶を吐きだしそうになつた。それを見てジユディは笑つた。

「あなた、まだカナエのことを好きなんでしょう？」

ジユディは俺に紙ナップキンを渡しながらそう聞いた。

「もちろんだ。しかも俺達は付き合つてる。」

「嘘でしょ？！」

ジユディは俺の言葉に目を丸くした。

「本當だ。2年近くになる。」

「そつ。じゃあ、きっとカナエはウンつて言わないかしら」

ジユディはテーブルの上に置かれたチョコレートケーキに視線を落としながらつぶやいた。

「なんのことだ？」

「聞いてないの？」

ジユディはまことにとつたところのようなばつの悪そうな顔になつた。

ここ数日俺は彼女と連絡をとつてなかつた。

「頼む。教えてくれ」

「多分。カナエはシンに心配させたくないから、言わなかつたと思うんだけど」

ジユディは言はずらそうに口を開いた。

ジユディと別れた後、俺は茫然とした。

香港行きの話があつたなんて聞いたことがなかつた。

昨日話したばかりと言つてたから、聞いてなくて当然かもしけないが

俺はショックだつた。

「カナエ」

アパートの下で待つてゐる俺の姿をみて彼女は驚いていた。

「電話すればよかつたのに」

彼女をそう言って、俺を部屋に入れた。

「カナエ！」

俺は自分の気持ちを抑えきれなつた。

玄関口で俺は彼女を抱きしめた。

「松山？！」

彼女は体をこわばらせていた。

「行かないでくれ。お願ひだ」

俺は自分が泣いているような気がした。彼女はゆっくり、しかし強

く俺を拒否した。

「ごめん。松山。私は決めたんだ。香港で自分の可能性を試す。日本のことすべて忘れて」

彼女の瞳には強い意思が宿っていた。

「俺のせい？」

なぜか俺はそう口にした。

俺は知っていた。

俺の気持ちが彼女に負担をかけていたのを。

「違う。誰のせいでもない。ごめん。松山。お願ひだ。行かせてくれ。」

彼女は俺の腕を強く掴んで、俺を見上げた。その瞳は涙で潤んでいた。

嘘だ

彼女はあいつから、あいつへの気持ちから逃げるために日本を出たいんだ。

そして俺からも逃げるために

俺は強引に彼女を抱きよせ、その唇を奪った。彼女が珍しく抵抗したが、俺の方が力は上だった。

俺はそのまま彼女を押し倒した。

最低だ。

俺は自分が最低なことをしてることを知っていた。

でも彼女を逃したくなかった。

行為が終わった後の彼女は無言でシャワールームに歩いて行った。

俺を責めようともせず、無言だった。

じじりなしかその背中が泣いていたようだった。

俺は自分が情けなかつた。

彼女を苦しめたくないのに、苦しめてる自分が嫌だつた。

「松山」

ベッドに腰掛けうつむいている俺に彼女は声をかけた。シャワー上がりの石鹼のさわやかな香りがした。

「ごめん」

彼女は俺にそう言った。彼女の目は真っ赤に腫れていた。

「ごめん」というべきなのは俺だ。

俺は彼女を見ていた。自分がどういう表情をしているのかわからなかつた。

捨てられた子犬のような顔をしてるのだろうか

「松山 本当にごめん。今までずっと側にいてくれたのに
彼女はぽろぽろと涙を流して続けた。

初めて見た涙だった。

俺のために泣いている?

「私はここでは生きていけない。新しい土地でやり直したいんだ
俺は黙つて彼女の言葉を聞いていた。

彼女は憔悴しきっていた。

いつの間にこんなに痩せたんだろう。

東京にきてから彼女はこんなに華奢になってしまった。

「俺ならお前をずっと守つてやれるの」

俺の言葉に彼女は何も答えなかつた。

わかつっていた。

彼女は逃げたいんだ。
すべてのことから。

俺から、あいつから

俺は彼女を抱きしめた。
涙が出てきた。

「カナエ わかつた。わかつたよ。今までごめん。好きだつた。ず
つと好きだつた。」

俺は馬鹿みたいにそう繰り返した。

胸がえぐられるよつだつた。

でも、俺は彼女を本当に好きだつた。

彼女をこれ以上苦しめたくなかった。

松山シンスケ5（後書き）

この後、上杉力ナエは社員旅行に行きます。
そして「南国の魔法」へと続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8795p/>

松山シンスケ－南国の魔法番外編－

2011年7月12日12時10分発行